ヤスクニ通信　No.246　2020 年 10 月 16 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日　7:00～9:00pm（休日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035　FAX 03-3238-0797　（注）現在、同場所建替で移転予定。

ヤスクニ・レポ　247

祭神としての感染症死者

山川暁（日本キリスト教会東京告白教会会員）

病気を理由にして首相の座を投げ出したのが安倍晋三である。その安倍前首相は９月１９日に靖国神社に参拝した。安倍晋三自身が、そのことをツイッターで明らかにしている。「本日、靖国神社を参拝し、今月１６日に首相を退任したことをご英霊にご報告いたしました」、と。

首相を務めてきた安倍晋三にとっては、日本の国で生活する人々よりも、「英霊」の方が大事であったということである。戦争を讃え、賛美する人々の中には、戦争に動員され、死んだ兵士や軍属を「英霊」と呼んでいる人々がいる。だが、靖国神社は単なる宗教法人の一つにすぎない。靖国神社が祭神として祀っているのは「英霊」なのである。靖国神社が戦争の神社といわれるゆえんである。宗教法人靖国神社は宗教法人としての目的をこう述べている。「本法人は明治天皇の宣らせ給うた『靖国』の聖旨に基き、国事に殉ぜられた人々を奉斎する祭神の遺族とその他の崇敬者を教化育成し、社会の福祉に寄与し、その他、本神社の目的を達成するための業務を行うことを目的とする」、と。

「国事に殉ぜられた人々」とは戦争に動員されて死んだ兵士や軍属のことである。そうした死者を「英霊」として崇め、顕彰して祭神として祀っているのが靖国神社である。安倍前首相はいわゆる戦争法案を強引に成立させ、日本を戦争の出来る国にした人物である。安倍前首相には過去の歴史から真摯に学ぶ姿勢はなく、戦前回帰を夢見ていて政治を行ってきた人物であったことを見落としてはならないのである。

一方、日本の教会は敗戦を体験して、過去の歴史から学ぶ必要を覚えている。その証しとして「ヤスクニの集い」が毎月持たれているともいえるのである。亡き西川重則長老はそのことを、この集いで説き続けて来られことを覚えたいと思う。

さて、今年は新型コロナウイルスによって、「ヤスクニの集い」も大きな影響を受けてきた。だが、このコロナウイルスを通して、靖国神社の過去の歴史にあったことを知る機会が与えられている。それは靖国神社も、過去において感染症による死者との問題に直面させられていた事実があったことである。それは同時に靖国神社が死者を差別していた過去を持った神社でもあったという事実である。

靖国神社が国民の間に広く、その存在を認められるようになったのは日露戦争以後のことであるといわれている。靖国神社が戦争の神社といわれるように、国民は靖国神社の存在を外国との戦争によって、認識するようになったのである。明治政府が最初に実施した対外戦争は日清戦争であった。戦死者は１万３千人余りであったといわれている。だが、戦闘での死者は１２００人余りでしかなかった。犠牲となった兵士の大半が赤痢やマラリア、コレラといった感染症によるもの 44464 であった。

だが、戦病死者は靖国神社では祭神として祀られることはなかったのである。戦病死したものは不名誉な犬死とみなされていたのである。靖国神社に祀られるのは戦闘死者であり、戦傷死者であり、戦闘中の事故死者であり、捕虜となって死んだものに限られていたのである。祀るべきかどうか、死者を峻別していたのである。

日本政府は対ロシアとの戦争に備え、軍備の拡張に邁進していた。当然、ロシアとの戦争で、犠牲となる兵士やその家族を無視することは出来なくなる。それで、戦死者は、たとえ戦場で病死したものでも、靖国神社に祭神として祀ることにしたのである。具体的には１８９８年になって、陸軍大臣は次のような告示を出すのである。戦地おいて疾病若しくは災害に罹り又は出征事務に関し死没したる者を戦死者同様に合祀する、と。つまり、日清戦争において報いられなかった戦没者の大部分を占める戦病死者の処遇について、国家の態度を明確にしておかなければ対ロシア戦のための軍備拡張への国民の合意は得られないとの判断があったのである。

その国家の態度とは、戦場で死んだ者は、いかなる者であっても靖国神社に祭神として祀ることを明確に打ち出すことであった。つまり、国家が靖国神社を戦争の神社であることを、ここに明確にしたということである。

コロナ禍にあるなか、今年も８月１５日に靖国神社の拝殿横に立って、参拝者の姿をウォッチングした。参拝者には子どもを連れた若い夫婦の姿が目立った。この人たちは靖国神社が戦争の神社であることを知って参拝しているのかと思わされた。キリストの教会は福音を伝え、イエス・キリストを証しつつ、同時に靖国神社が戦争の神社であることを告げ知らせて行かなければならないと改めて思わされた次第である。

２０２０年９月１８日例会奨励「香油注ぎ」
マタイの福音書２６章１～１３節　柴田智悦牧師（日本同盟基督教団横浜上野町教会）

イエス様に「非常に高価な香油」を約三百グラム、すべて注いでしまった女性に対してイエス様の弟子たちは「憤慨」しました。しかし、直前にイエス様がおっしゃったのは、最も小さい人が苦しんでいるのはイエス様ご自身がその人の中で苦しんでいるのであって、その苦しんでいる人に奉仕することがイエス様に奉仕することだ、ということでした。逆に、イエス様に奉仕しようとするならば、苦しみの中にある最も小さい人に奉仕しなければならない、ということだったのです。

ところが、イエス様はこの女性が「わたしを埋葬する備えをしてくれたのです」と言われました。人が死んで葬られるということは、この世における最大の苦しみです。イエス様は二日後には「十字架につけられるために引き渡され」死んで葬られるのです。イエス様は今、そこに向かって歩んでおられるのです。さらに、人間の苦しみを遥かに凌駕しているのが神である主ご自身のお苦しみです。罪のないお方が罪とされ、永遠に生きておられる方が十字架で死ななければならない、という想像もできない苦しみ、さらに、最愛のひとり子を十字架に架けられ、呪い殺さなければならない、という父なる神の苦しみです。

弟子たちには、最も身近な隣人であるイエス様が、二日後には苦しんで死なれ、埋葬される、その最大の苦しみを今受けておられ、最も小さな貧しい人になっておられる、ということが全然見えていなかったのです。この女性だけが、その事実を見据えていました。ですからイエス様は、彼女について最大級の褒め言葉をかけられました。イエス様の十字架と復活による私たちの救いについて宣べ伝えられる時に一緒に語られるのは、この女性がイエス様に高価な香油を全部注ぎ、イエス様の埋葬の用意をしたことなのです。それは、憎しみや裏切りや陰謀の渦巻く中でイエス様に対してなされた献身であり、いのちをかけた信仰告白でもあったからなのです。そしてこの時しかイエス様の埋葬のために香油を注ぐ機会はありませんでした。

イエス様が再臨されて行われる最後の審判は、救い主として審判され、罪の問題が解決されます。この世の最大の問題は、苦難ではなく罪であり、その罪から私たちを救ってくださる救い主、イエス様がその罪を贖われるためにこれから十字架に掛かられるのです。イエス様に香油を注いだのが、埋葬の用意だった、ということにはそのような意味が込められていました。この罪からの救い主、ということが福音の中心です。彼女はまさにこの福音の中心である救い主キリストに、文字通り油を注いだ者となったのです。

イエス様がおっしゃったように、弟子たちはこれからいつでも貧しい人たちに仕えることができます。しかし、イエス様に直接仕える機会はもはや来ることはないのです。弟子たちはこのことに気づかず、ただ一人の女性だけが気づいて、イエス様に対して愛と献身を捧げ、イエス様もそれをお受け入れくださいました。復活されたイエス様は、世の終わりまで、いつも、私たちとともにおられますから、その時私たちは、貧しい人たちに香油を分かち合うべきなのです。しかし、この時はまだイエス様ご自身がおられ、苦しまれていたのですから、イエス様にこそそれを捧げるべきでした。

私たちにとって最も小さい隣人とは誰でしょうか。この時弟子たちは、最も身近にいたイエス様が最大の苦しみに向かっている最も小さな者になられていることに気づきませんでした。そのように、私たちが香油を注ぐべき人は最も身近な人かもしれません。さらに、その時イエス様はユダヤ社会の嫌われ者で、いのちさえ狙われていたほどでした。そのように、どちらかと言えば私たちの嫌いな人、あまり関わりたくない人に私たちの用意した香油、ご聖霊の賜物を注ぐことが、イエス様に香油を注ぐことになるのです。その時、私たちの神の家、教会が香油のかおりでいっぱいに満ちるのです。